

2014 年度 SVS Vascular Annual Meeting 紀行

東京大学血管外科 橋本拓弥

2014 年 6 月 5 日から 7 日にボストンの Hynes Convention Center で開催されました SVS の Vascular Annual Meeting に参加してきましたので、簡単にご報告させていただきます。私自身は、VAM (June meeting と呼ばれることも多いようです) へは、サンフランシスコで開催された昨年度に続いて 2 度目の参加で、今回は幸運にもポスター発表をさせていただく機会を得ています。

ボストンは、ご存知のようにアメリカでも一番古い歴史がある街のひとつで、1630 年にイギリスからの清教徒により築かれ、現在はアメリカでの高等教育や医療、金融の中心地となっています。私は学生時代に Mass General Hospital の Richard P. Cambria 先生のもとで 1 ヶ月臨床実習をしたことがあり、14 年ぶりの訪問となりました。また宮田哲郎理事長をはじめ、医局の先輩方が多く留学された町でもあり、私の少ない国際経験からすると、比較的親しみを感じられる街です。

学会の様子ですが、まず今回の President である Dr. Julie Freischlag の opening remark で、今年から SVS 日本支部と台湾支部が加わった旨のアナウンスがありました。発表演題に関しては、ESVS の場合もそうなのですが、基本的に Plenary session が行なわれるのはメインホール一箇所であり、複数の会場で同時並行することがありません。必然的にここに採択される演題数はかなり絞られることとなります。Plenary session はわずか 27 演題で、今年は残念ながら日本からの発表はありませんでした。Poster session は 120 演題で、日本の施設からは私を含めて 3 演題、アメリカに留学されている先生から 2 演題ありました。

Plenary session では、EVAR 後破裂の話題、胸郭出口症候群の治療成績 (日本と比べると非常に多い)、CLI に対する Wifi classification の有用性、腎動脈瘤の手術適応について 2cm 以上の手術適応は行き過ぎとする報告などが印象に残りました。やはり各種大規模データベースを用いているか、あるいは単施設でも母数が多く、そのぶん同じ Study design であれば結論に説得力があります。

Breakfast sessions は早朝 6 時 30 分からです。米国人は早起きなのか大入りで、私も時差ぼけを活用して参加しました。印象的だったのは Mehta らの Albany vascular group が行なっている破裂性大動脈瘤に対する地域での取り組みです。緊急 EVAR のインフラの整った高次施設 (Acute Aortic Center: AAC) と、Open で対応する周辺の地域病院との間でネットワークを形成して、可能であれば AAC に搬送した上で、Open or EVAR (やや Open が多い) の治療方法を選択するアルゴリズムで救命率を向上しています。そもそも半径 50-100 マイルほどのエリアで AAC オペ室までの平均移送時間 1.2 時間とのことで、もちろんへり搬送も多いでしょうが、日本で考えると東京を中心としてほぼ関東全域ということになり、人口密度と距離感の差を感じます。ただ AAC を地理的中心に Vascular Group を形成して連携をとるという意味では、ひとつのやり方として日本でも特に地方で参考になるのではないかと感じました。12 年間 421 例で 2/3 ほどが AAC に移送され、地域病院での Mortality 51% (非手術含めると 61%)、AAC での Mortality 29% の成績でした。仮に狭い日本で各医療圏に AAC とアルゴリズムを設定することができれば、いい結果が期待できそうです。

今回何より楽しみにしていましたのは、血管外科領域で日本から米国へ留学して、活躍されている先生方にお会いすることでした。また国際学会の特典だと思いますが、普段国内の学会ではなかなか機会が得られないような先生方と、世代を越えた交流ができます。この紀行文を書かせていただくことになったのも、University of Wisconsin Madison でご活躍されている山之内大先生の Breakfast session を聴きにいらしていた古森公浩教授にお声をかけていただいたからのことでした。短い滞在で観光はあきらめていましたが、それより湿度のない穏やかな気候のなか、魅惑的なロブスターとニューイングランドスタイルのビールで過ごす諸先生方との楽しい夜が Priceless でした。

来年の VAM はシカゴ、再来年はワシントン DC で開催予定となっています。

最後に、海外学会参加の貴重な機会を与えて下さいました重松邦広先生、小山博之先生をはじめ、快く送り出していただいた東大血管外科のスタッフの皆様に深く御礼申し上げ、報告とさせていただきます。



学会エントランスにて

左から

高山利夫先生 東京大学→ウィスコンシン大学留学中

工藤敏文先生 東京医科歯科大学

山本晃太先生 東京大学→イェール大学留学中

大峰高広先生 松山赤十字病院

橋本拓弥 筆者 東京大学

藤村直樹先生 慶応大学→スタンフォード大学留学中

望月康晃先生 東京大学

山本諭先生 青梅市立病院